

Utsunomiya University Architectural Tour in London



2018 年度 宇都宮大学 地域デザイン科学部 建築都市デザイン学科 学外実習 宇大生国際連携 2018



建築学外実習 2019 について

About



授業の流れ

学生が訪問場所の選定・スケジュール管理・各種手配を行い、教員は他大学へのアプローチ・訪問先でのサポートを行う。今年度はイーストロンドン大学訪問が決まっていたことから、イギリス・ロンドンが訪問地となった。

今年度の参加者・日程

- 2019.3.12 宇都宮出発・2 グループに分かれイギリスへ
- 2019.3.13 ロンドン到着・合流
- 2019.3.14 ロンドンの建築専攻を有する大学訪問・中心部建築見学
- 2019.3.15 オックスフォードの建築見学
- 2019.3.16 2 グループに分かれ見学（レッチワース&ケンブリッジ&ハーロー・ロンドン中心部）
- 2019.3.17 自由行動日
- 2019.3.18 イーストロンドン大学にてレクチャー・ワークショップ（チャコールによるスケッチ）
- 2019.3.19 イーストロンドン大学にてワークショップ（石膏模型作成）・発表会
- 2019.3.20 現地解散（一部学生は、後泊としてヨーロッパ建築見学を継続）

イーストロンドン大学について

イギリス・ロンドンの東部に位置する大学である。イギリス国内でも建築教育は著名であり、活発な建築教育が行われている。現在、宇都宮大学出身の古川敏也氏が講師として在籍している。

指導教員・参加者



Takaaki Koga

古賀 誉章

宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 准教授



Akio Yasumori

安森 亮雄

宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 准教授



Toshiya Kogawa

古川 敏也

University of East London Lecturer



Yuka Ishida

石田 優花

宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 学部2年



Reo Kurihara

栗原 怜央

宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 学部2年



Fuma Sugawara

菅原 風馬

宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 学部2年

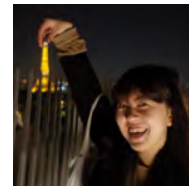
Member



Nayuko Suzuki

鈴木 菜結子

宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 学部2年



Julia Tazawa

田澤 樹里亜

宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 学部2年



Yoshihiro Tsukahara

塚原 佳央

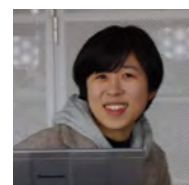
宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 学部2年



Motoki Terasawa

寺澤 基輝

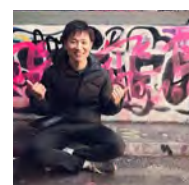
宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 学部2年



Fuka Motoki

元木 風香

宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 学部2年



Hidekatsu Moriai

盛合 一功

宇都宮大学 地域デザイン科学部
建築都市デザイン学科 学部2年

見学の振り返り 2019.3.13-2019.3.20

Diary



2019.3.14.Thu



9:00	出発
10:00	UCL(The Bartlett)
11:20	Hawkins Brown
14:00	大英博物館
15:00	AA スクール
17:30	テムズ川周辺散策
19:00	古川先生とキックオフ
22:00	帰宅

一日を通してロンドンの今の建築について学んだ。UCLとAAスクールでは中まで案内していただき、学生たちがどのような環境で建築を学んでいるのか知ることができた。また、Hawkins Brownではロンドンでも有数の建築事務所を見ることができ、そこで働いている2人の日本人の方からいろんな話を聞くことができた。夜は今回のワークショップでお世話になる古川先生とキックオフし、1週間の滞在の中での課題を得た。

UCL(The Bartlett)

建築を学ぶ環境の充実さに驚きと羨ましさを感じた。製図室には学生たちが作成した模型や図面が貼られていて、そのデザインの自由さや創造性の豊かさに勉強させられることばかりだった。また、改築した Bartlett には、創造性を掻き立てる踊り場の広さや余白、その他階段や1階の展示スペースなど、様々な魅力ある空間が見られた。



UCL の製図室

Hawkins Brown

UCL を案内していただいた方の紹介でロンドンの建築事務所を見学させていただいた。ここで働く2人の日本人の方から、Hawkins Brown の取り組みやロンドンの大学の仕組みなど貴重なお話を聞くことができた。特に、事務所内で試行した席のレイアウトやそのアンケート調査をプロジェクトの一環とした取り組みは面白いと思った。その空間を見て感じられたことがまた良かった。



安さんから話を聞いている様子

AA スクール

ここもまた建築を学ぶ学校である。学生が私たちを案内してくれ、いろいろな施設を見ることができた。UCL と共通していたのは、ものづくりの重要性が感じられる空間とコミュニティスペースの存在である。印刷室や作業場などその行為にあった部屋が備えられ、学生たちの交流スペースも十分にある。またAAスクールは外観からは想像できないほど内部に部屋が多く、その造りにも興味を持った。



学生が私たちを案内してくれた

古川先生とのキックオフ

ロンドン滞在のうち2日間お世話になる古川先生と合流し、食事を楽しみながらどのようなワークショップにしていけるのか共有した。私たちに与えられたのは、ロンドンのまちや建物を見ていく中で自分の印象に残るまたは好きなものをスケッチするなどの準備課題である。古川先生は宇大の卒業生ということもあって、共通の話題も多く楽しい時間を過ごすことができた。



ディナーの様子

2019.3.15.Thu



オックスフォードの行き方：Paddington までオイスターカードを利用し、Oxford までは鉄道切符（GWR）をネットで事前予約し当日購入。
オックスフォード内は徒歩で回ることができる。

8:00	出発
10:17	Oxford 着
	ピットリバース博物館
	自然史博物館
12:00	Kings Arms Oxford(ランチ)
	ボドリアン図書館 (30 分コース)
	ラドクリフカメラ
	セントメアリー教会
	クライスト・チャーチ・グレートホール
17:01	Oxford 発
18:49	Royal Albert Hall(Stop RC) 着
19:30	MOUNTBATTENFESTIVALOFMUSIC
24:00	帰宅



オックスフォードは 12 世紀に創立された名高いオックスフォード大学を中心とした、南イングランドの中央部に位置する都市。石づくりの古い町なみが広がりロンドン市内とは違う落ち着いた雰囲気味わえることができる。オックスフォード大学は規模の大きいカレッジ制の大学なので、日本の大学との差を生で感じる事ができた。見る場所もたくさんあり移動も往復約 2 時間以上はかかるため、1 日使用することを前提にするのが良い。また、ほとんどの建物が 17 時に閉館やお昼一時的に閉館するので、時間配分に注意する。
ボドリアン図書館、クライスト・チャーチ・カレッジ、ラドクリフカメラはネット予約可能。（ボドリアン図書館は当日購入、ラドクリフカメラは当日購入不可）ロイヤルアルバートホールでのコンサートもネット予約。カジュアルドレスコードと書いてあるが、普段の格好でも大丈夫。（ジーパンやサンダルは NG）



2019.3.16.Sat



	出発
10:15	Letchworth Garden City 着
10:45	The International Garden City Exhibition
12:00	Cambridge Station 着
13:00	ランチ
14:00	有名建築巡り
15:30	ケム川をパンティング
19:00	Harlow Town 着

- ケンブリッジの行き方: King's Cross までオイスターカードを利用し、Cambridge までは鉄道切符。切符はアプリ [Train line] で事前予約し当日購入。
- The International Garden City Exhibition は入館用無料
- パンティングは有料 (3000 円程度)
- ケンブリッジでは市場をやっていた。

Letchworth Garden City

レッチワースは、世界で一番最初の田園都市であり、都市の農村の長所を合わせ持つ都市を想定して計画されています。実際に行ってみると、駅周辺には大きい通りが3本ほどあり、それぞれお店が並ぶような通りや噴水に続く広場のような通りがありました。これらの通りを抜けると住宅が広がっていき田舎のような雰囲気がありました。ロンドンとは違って、街に対して人や建物の密度が小さく、緑豊かで心が癒される街でした。

(The International Garden City Exhibition)

ここでは、レッチワースの計画資料や昔と今の街の風景写真などが展示されている歴史資料館的な建物でした。大学の教科書でも載っていた、レッチワースの都市計画のダイアグラムも見れました。入場料は無料で予約もいりませんでした。



レッチワースの住宅地風景



レッチワース資料館内観

Cambridge

ケンブリッジは、大学や教会が多いことで有名です。この日は、市場がやっていて、そこで昼食をとりました。街に流れているケム川沿いにキングス・カレッジ、クイーンズ・カレッジなど大きいカレッジや、ため息橋や数学橋などの観光名所があり、パンティングをしながら見学することで短い時間で多くの名所を見ることができました。街全体としては駅周辺には、現代的なガラス建築がみられましたが、街の中は道が入り組んでいて、建物は外壁が石やレンガで統一され重厚感のあるファサードで、高い建物が多く街全体から歴史を感じられ旅の中で一番迫力のある街でした。



ケンブリッジ街並み

Harlow

ハーロウは、世界で三番目のニュータウンとして知られていますが、この日は、歩道が整備中で歩いて散策することができませんでした。また、私たちが訪れるころには、暗くなっていたため偶然駅にきたタクシーで2駅間を走行しながら見たところ、日本にもみられるような大型の商業施設が道路に面してたくさん並んでいました。



ケム川のパンティング

2019.3.17.Sun



10:00	出発
11:00	Kingsbridge 着
11:30	サーペンタイン・サクラー・ギャラリー見学 The Magazine でお茶
12:30	ケンジントン・ガーデンズで散歩
13:30	デザインミュージアム
15:00	近くのベーカリーで軽食
16:00	ロンドン自然史博物館見学
18:00	V&A 見学
19:00	帰宅

ロンドン 5 日目。それまでは生徒と先生含めた 11 人で行動していたが、この日は終日自由行動だった。朝早くに出発してとにかくたくさんの場所を巡ったり、のんびり散策したりとそれぞれ楽しんだ。集団で行動するのが息苦しく感じられるようになっていた時期だったので、良いリフレッシュになり、翌日からの古川先生によるレクチャーに向けてそなえられた。

The Magazine

サーペンタイン・サクラーギャラリー別館のカフェ。設計はザハ・ハディッド。ガラスの壁面と流線的な屋根が特徴的。隣のギャラリーが一部食い込んでおり、ギャラリーの外壁がカフェの内壁となっている部分がある。室内にはレンゲのようなものが柄を下にして 5 本立っていてそこから光が差し込んでいた。あえて写真はあまり撮らず、スケッチを多くした。やはり写真も撮っておけばよかった。



レンゲのスケッチ

ケンジントン・ガーデンズ

ロンドン中心部の公園。日曜日だったこともありとてもたくさんの人が訪れていた。犬と散歩したり、ランニングをしたり、親子で散歩をしたりとそれぞれ思いおもいに過ごしていた。都市の中心部にこのように広くて自由に使える場所があること、それが生き生きと利用されている姿がとても良いと思った。鳥もたくさんいた。写真は持参した「写ルンです」で撮った一枚。



池ほとりの鳥

訪問先の例

- ・大英図書館：イギリスの国立図書館
- ・テートモダン：20 世紀以降の現代美術にテーマを絞った美術館
- ・デザインミュージアム：20 世紀以降のデザインに特化した展示。
- ・ビクトリア・アンド・アルバートミュージアム：絵画、工芸品、舞台芸術、ファッション、写真、家具など様々な展示品がある。
- ・リパティ：イギリスを代表するデパートの一つ。
- ・シティ散策：ビジネスの中心地。歴史ある建物が残りつつも、新しい高層ビルが立ち並ぶ。ロンドン市庁舎、30 セント・メリー・アスク、スカイ・ガーデンなどを見学。
- ・タワー・ブリッジ：テムズ川にかかる、上げ下げできる跳ね橋を持つ。
- ・ミレニアム・ブリッジ：2000 年を記念してできたテムズ川にかかる



ロンドン市庁舎を眺める



タワー・ブリッジと共に

2019.3.18(Mon)



8:00	出発
9:08	Cyprus 着 (UEL 着)
9:30	オリエンテーション・レクチャー
11:00	デモンストレーション
11:30	キャンパス見学
12:00	ランチ
13:30	ワークショップ (スケッチ)
18:00	Cyprus 発 (UEL 発)

この日は、一日を通してイーストロンドン大学で学びを深めました。現地の大学の建築学科ではどのような学習をしているのか、宇都宮大学建築学科 OB であり、現在イーストロンドン大学でご指導されている古川先生からのレクチャーを受けました。レクチャーでは、現地の大学では学生各々の創造性を尊重し、クリエイティブな授業が行われていることが分かりました。

ワークショップ



スケッチの様子

日本の建築学生では必ず学習するような数学や構造力学の学習はほとんどなく、地震の有無などの住環境によって学びの内容も変わるということを知りました。レクチャーの後は、翌日私たちが行なう予定である石膏模型の作り方について、実際に古川さんに一から実演していただきました。午後にはその日の実習として、大きな画用紙 (A1 サイズ) にチャコール (炭) で各自がイギリスを訪れた中で印象に残った建物をスケッチしました。スケッチでは、建物の凹凸を線ではなく面で捉えることを意識するような指導を受けました。建物を描くにあたり、各々が自分の記憶を辿りながら 3, 4 枚ほどのスケッチを仕上げていきました。建物をなんとなく見るのではなくその建物の魅力をより具体的に見つけ、感じ、身につけることが大切という話に納得しました。続けて安森先生による研究発表があり、私たちが普段見る安森先生とは一味違う姿に憧れと改めての尊敬を感じました。現地の学生にも関心のある話題だったようで、積極的に講演を受けているようでした。



古川先生によるレクチャー



石膏模型の作り方講座

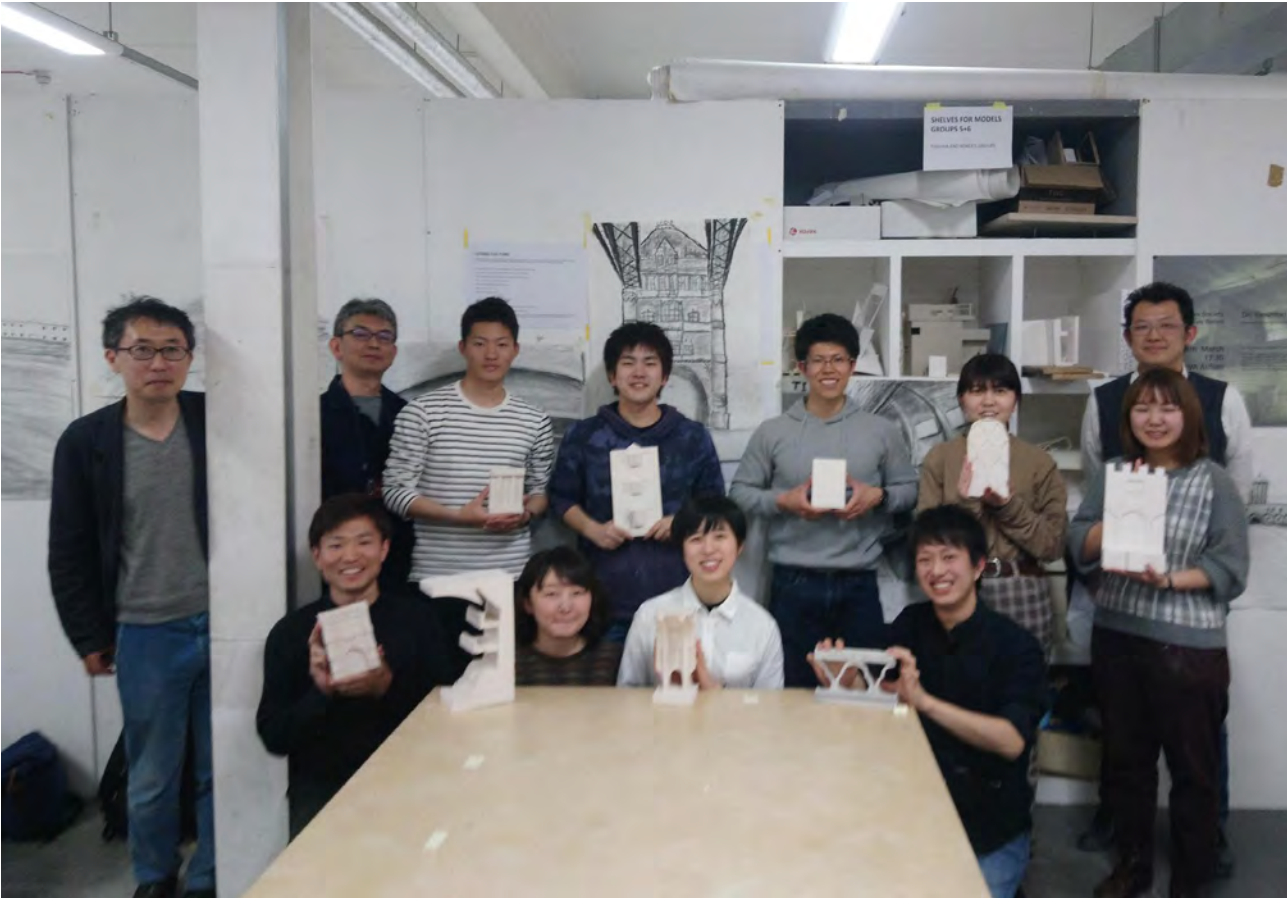


現地の先生による講評



安森先生の講演

2019.3.19(Tue)



8:00	出発
9:30	オリエンテーション・レクチャー
11:00	デモンストレーション
11:30	キャンパス見学
12:00	ランチ
13:30	ワークショップ（スケッチ）
19:00	パーティー

この日は、一日を通してイーストロンドン大学で学びを深めました。現地の大学の建築学科ではどのような学習をしているのか、宇都宮大学建築学科 OB であり、現在イーストロンドン大学でご指導されている古川先生からのレクチャーを受けました。レクチャーでは、現地の大学では学生各々の創造性を尊重し、クリエイティブな授業が行われていることが分かりました。



本日は先日同様、イーストロンドン大学でワークショップを行いました。先日、古川先生のご指導のもと、自分でスケッチを行ったロンドン市内の魅力的な部分に注目し、実際に石膏模型を作りました。今までに一度も経験をしたことのない模型の作り方に悪戦苦闘するものの各自が納得のいく模型を作る事が出来ました。日本での建築学生の模型はスチレンボードで作ることが多く、それが常識だ感じてましたが、石膏模型を作ることで他にも表現の仕方はあると学ぶことが出来ました。作業を行ったワークショップ室には木で作った模型や、ボルトを使った模型、3D プリンターを用いた模型など幅広い表現の作品があり、私たちも自分の作品の表現のために工夫することの大切さも感じました。その後、自分の作った石膏模型をイーストロンドン大学の学生の前で説明しました。拙い英語だったにもかかわらず、笑顔で話を聞いてくれる学生の姿には心からの優しさを感じました。最後の夕飯は安森先生、古賀先生、古川先生を含めた全員で食べました。先生方と密に話せたこともだが、ロンドン最終日ということもあり切なさと共に達成感のある充実した夜になりました。



厚紙を重ねて型を作っていく



石膏を流し込む

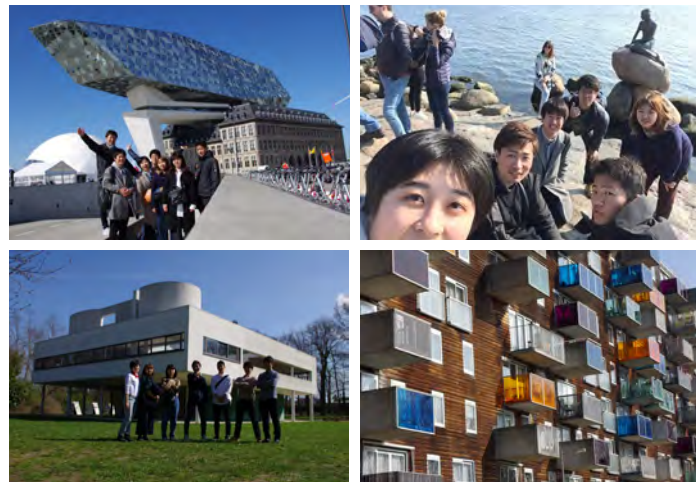


UEL の学生も交えた講評会



ロンドンでの最後の晚餐

番外編：後泊について



今回、訪問国がイギリス・か国のみだったこともあり、学生有志7人でフランス（パリ）・ベルギー（ブリュッセル・アントワープ・ブルージュ）・オランダ（アムステルダム・ロッテルダム）・デンマーク（コペンハーゲン）・フィンランド（ヘルシンキ）を2週間かけてまわりました。国をまたぐたびに代わる建築様式や、最新の建築に私たちは圧倒され、非常に良い経験となりました。

（写真は左上からヘルシンキ中央図書館 Oodi、アントワープ港湾局、デンマークの人魚像、パリのサヴォア邸、アムステルダムのオクラホマ）

学生の感想・Workshop について Student's Voice





石田優花 / 実習全体の感想：チャコールでのスケッチ・石膏模型作り体験、英語での生活・プレゼンテーション、海外の有名建築に実際見る触れる、なかなかできないレアな体験ができたことは、私にとってかなりの収穫だった。知らないことがたくさんあり、自分の未熟さを痛感し、建築の勉強をもっとしなければならないと焦りを感じた。また、海外の建築大学の模型の表現の質・自由さ、石膏に触れてみて、模型の表現の仕方を変えていきたいと思った。また、建築に関することだけではなく、様々なものづくりに挑戦してみようと思った。

海外の大学との日程調整・建築リサーチ・ロンドンの交通機関の把握・宿泊施設の予約など

今回の学外実習を経てしたいこと・しないと決めたことが見つかり、とても有意義な旅行となった。



石田優花 / 石膏模型・デッサンについて

テーマとしたのは、オックスフォードにあるクライスト・チャーチ・カレッジの中庭。石膏模型は、中庭を囲む建物の一部分だけを作成した。窓枠や柱やアーチのくぼみを再現することに力を入れ、石膏を型枠から外した後に、レンガの模様を付けるなどして細部まで表現した。写真を見返し、観察し、作りながら全体を仕上げた。スケッチは、中庭の全体を画いたものである。柱やアーチの凹凸に特に力を入れて書き、建物全体に色を入れて、面を表現した。



栗原怜央 / 自習の感想：ロンドンでの一週間は自分にとって様々なことを学ばせてもらう一週間であった。建築のことについてはもちろんであるが、海外に行き自分たちで日程を組み、調べ、過ごすことがとても新鮮で学ぶことが多くあった。今回の海外実習は今までとは異なる部分がある。それはツアーに参加するのではなく自分たちで全て決める方式であったことである。具体的には訪問する場所、移動手段、宿泊先などを参加メンバーで決定した。また、日程担当やしおり担当、会計担当など役割を分担し、実習に向けて準備した。当然、準備しなければならないことが沢山出てくる。なので何度もメンバーで集まり会議を開くことになる。つまりツアーに参加するより、事前準備がだいぶ忙しくなる。しかし自分たちで全て決めることこそ今回の実習の肝であり、為になる場所であった。実際やってみると案外スムーズに決まることもあったりうまくいかないこともあったり、試行錯誤の連続であった。実習の中で慣れない海外での生活ということもあり、ハプニングは多々あったが解決するのも醍醐味だと感じた。ロンドンでは片言の英語でも案外通じるものだった。町並みがこんなにも違うことを知った。全てが新鮮で新しい経験だった。行ってみないとわからないことがある。ということを最も感じた。これからは様々な物をできる限り実際に見ていきたい。



栗原怜央 / 石膏模型・デッサンについて：自分は大英博物館の一部を石膏模型で表現した。ロンドンで最も印象に残った建物のひとつである大英博物館入り口部分の巨大な柱を強調した石膏模型を製作した。石膏を固めるための型枠を丸め、うまく表現することができた。イーストロンドン大学の施設や設備を使わせてもらい模型を製作した。石膏模型を制作するのは初めてで新鮮だった。実際の建物に近い素材で作ることもまた普段とは違う経験になった。大学に置いてある模型には木材や金属、石膏など日本ではあまり見ない素材を使用していて面白かった。スケッチでは木炭を使って描いた。ペンや筆以外のもので描くのも新鮮であった。古川先生のレクチャーやイーストロンドン大学生との交流など、大学の雰囲気を感じさせてもらうことができて良かった。





鈴木菜結子 / 実習全体の感想: 私は、今回の学外実習が初めての海外渡航でした。初めは出国・入国の仕方も分からないような状態で、果たして無事実習を終え、異国の地で学びを深められるのかという不安感がありました。しかし、いざイギリスへ渡り街へ一歩踏み出してみると、感じたことのない雰囲気と初めて見る景色に圧倒され、のめり込んでいる自分がいました。正直、今回の学外実習へ向かう前まで海外に対する興味はかなり薄い部分がありましたが、実習後はまたすぐにでも海外へ行きたいと思うようになっていました。それだけ、自分にとって初めてだらけの貴重な経験だったのではないかと思います。海外の空気と建築、そして現地の大学の学びに触れ、忘れられない8日間となりました。

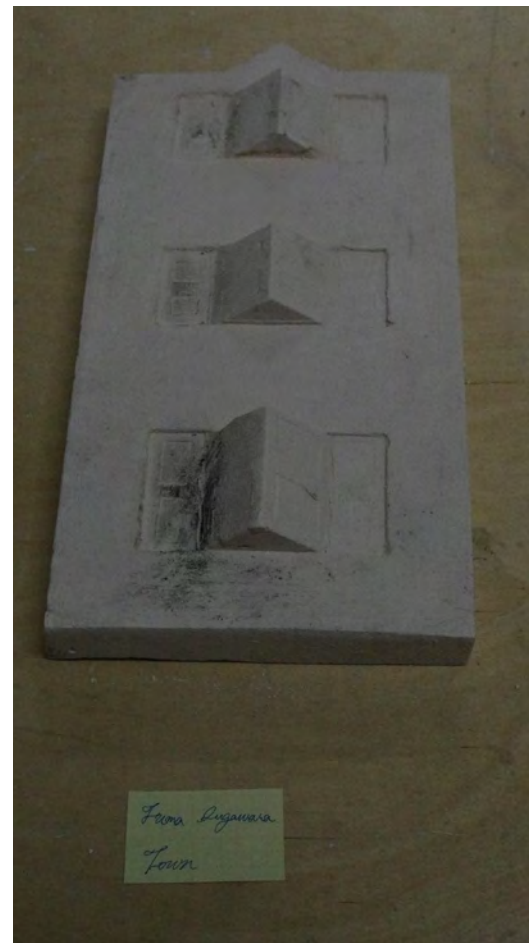


鈴木菜結子 / 石膏模型の感想: 私が初めての石膏模型で表現したのは、デザインミュージアムの内観です。外観は非常にフラットで、一見ビルのような建物なのか?とも思いましたが、中に一歩足を踏み入れると、空間の使い方が独特で大きな印象が残りました。私は、中でも特徴的な点であった屋根と吹き抜けと階段を表現することとし、建物側面の断面を模型にしました。

石膏模型は、日本の大学で一般的なスチレンボードなどの紙類に比べて手間がかかりますが、その分重厚感と質感が出て、独特の良さがあると感じました。



菅原風馬 / 実習全体の感想：イギリスでの実習は自分にとってかけがえのない経験になった。町並みや都市の構造は教科書やデータでのみ触れたことがあり、実際に見て触れたことはなかった。実物を目の前にすると、想像していた以上のスケール感、そして日本の町並みとのギャップに「すごい」以外の言葉が出てこなかった。どこに対して感動を覚えたのか、すごいと思えたのかを具体的に説明できるようになることがこれからの目標となった。



菅原風馬 / 石膏模型の感想：石膏模型は街の中にありふれている角地をピックアップしたものである。今回のワークショップで学んだことは考えたもの、感動したものを実際に形として表現することの重要性であった。また、それを表現するために作成と再考を何度も繰り返すことがより良いものに繋がるということを深く考えさせられたワークショップであった。



田澤樹里亜 / 実習の感想：ロンドンは過去と未来が混ざっているまちに見えた。それは高層建築やガラス張りのような目を引く建物と歴史的建物が共存しているという意味もちろんあるが、まちを歩く人々の多国籍さ、多種多様さからも感じられた。また、多くの建築物を見て回ったが、振り返ってみるとまだたくさん見るべき建物が残っている。特に心残りなのは、コートールド美術館が改修工事によって入れなかったことだ。近いうちにまた、このまちに訪れたい。私がこの実習で得たことは他にもある。それは集団で行動することの楽しさだ。学生9人で回ったのだが、ほぼずっと一緒だった。準備段階からみんなで計画を進め、現地ではそれぞれの知識を60% ぐらい発揮できたと思う。そんなものだろう。1週間のロンドン生活を充実したものにしてくれたみんなに感謝する。



△チャコールでのスケッチ

コートールド美術館を含むサマセットハウスのスケッチを行った。チャコールを使って描くこと自体初めてだったので、それに慣れるまでにも少し時間がかかったが、このスケッチで大事なことは線ではなく面で表現することである。面で表現するということはどういうことなのか、どうすればそれを表現できるのか、描きながら考え、ゼロの状態から1段階上がった自分に成長できたと思う。また、その建物の雰囲気をつかみ取ることも大事だが、プロポーシヨンや空間の広さなどを正確につかみ取ることによってその雰囲気を出すことができるのではないかと感じた。

▷石膏模型

オックスフォードにあるクライストチャーチのステンドグラスをモチーフとして石膏模型を作った。ポイントは曲線同士の組み合わせとその凹凸をどのように石膏で表現するかである。



△石膏模型の作成途中

普段私たちが模型に使用するのはスチレンボードやスタイロフォームといった軽い素材のものであるが、石膏は重く、正反対の素材である。石膏で模型を作るときに注意しなければいけないのは、自分の作りたいものの形をイメージし、その凹凸を逆にして考えることだ。完成するまで途中で修正することができないので、少し慎重にイメージを頭の中に浮かべながら作成する。この石膏模型で作ることの面白さは、出来上がった時に自分が想像していたものを超えたものがあらわれることだ。もちろん、失敗もそこで発見すると思うが、それも一種の面白さだ。



塚原佳央 / 実習の感想：建築学外実習を通して、日本とは違った大規模な建築を数えきれないほど見ました。美術館や教会など外観では各々似ている建物もあったが、美術館では空間のつながり・連続性に違いがみられ、教会では空間の明るさや間取りに大きな違いがあった。教科書や雑誌のような手に取れるようなものでしか見てこなかった多くの有名建築物達は、実物を目にするとどれも忘れられない衝撃を受けた。この実習を通して、建築に対する意識・モチベーションが一層高まった。



スケッチで行った川からのキングスカレッジの風景全体を石膏模型で表した。立体的な迫力のある石膏模型というよりは、立てかけておける程度のレリーフ的な模型とした。川と石垣と芝生のテクスチャの表現・自分とキングスカレッジとの距離感の表現がポイントである。



ケンブリッジを訪れたときの、パンティングをしたケム川から見たキングスカレッジのスケッチである。目の前の川とキングスカレッジ内の広大な芝生と遠くにもありながらも存在感を放つキングスカレッジを線ではなく、面で表現することがポイントである。



石膏模型は私たちが普段大学で行うような、スタイロフォームやスチレンボードの模型とは全く違っていた。石膏模型は、液体を流し固めて作るので、細かい部品の集合体ではなくそれ自体で完成品であるところが美しい。



寺澤基輝 / 実習の感想:ヨーロッパに行くのはこの学外実習が初めてだった。初日、地下鉄出口から見た初めてのヨーロッパの街並みの感動は大きく、今も忘れない。一般的な観光と違い、この学外実習では、UCL や AA スクールなど、世界的にも著名な建築学校の見学、また UEL でのレクチャーやワークショップなど、このプログラムでしか体験できない経験をたくさんすることができた。実際に他大学を訪問する中で、日本との教育の違いや、それぞれの教育の良さを見つけることができた。日本帰国後の建築へのモチベーションになるとともに、この学外実習で経験したことを他の学生にも広め、宇都宮大学の建築のさらなる発展に寄与していきたいと感じた。



鉄骨の骨組みが美しい、オックスフォード自然史博物館のスケッチと、その梁の石膏模型を製作した。無機質なイメージが強い鉄骨に、自然の曲線の美しさが盛り込まれており、非常に興味深かった。チャコールのスケッチでは、古川先生に何度も指導を頂きながら、構図や表現するものなどの練習を行った。最終的には A0 の大きな紙に書かせてもらい、体全体で力強く表現した。石膏模型では、古川先生や現地の学生から、「その細さは無理だよ」と言われつつ、細い装飾にこだわった。結局最後の肩を外す時に一か所破損してしまっただが、結果的に形になり、とても良い経験となった。今回は装飾的なチャレンジであったので、次回はもっと空間的な表現にチャレンジしていきたい。



元木風香 / 実習の感想：私は海外に行ったことがなく、今後も行く機会が少ないだろうと思い今回の学外実習に参加した。最初は大学時代の思い出の一つになればいいと考えていた。長いフライト終え、初めて歩いたロンドンの街には今まで写真や画面でしか知らなかった景色や、日本では見たことのない風景にあふれていて、この街で生活するのかなと思うと期待で胸がいっぱいになったのを覚えている。滞在中は9人で一つの家で共同生活を送りながら毎日ロンドンの街に出て、有名な建築物や美術館、博物館を見て回った。行く先で見たものを自分の手で記録したいと思い、常にメモ帳を持ち歩いて小さなことでもメモするようにした。建物を見るだけでなく、建築スクールの見学や古川先生によるレクチャーなど、イギリスにおける建築の学び方にもわずかながら触れることができた。非日常的な生活の中で今の自分を見つめ直すと、自分は建築を学ぶ意義を見いだせず、見いだそうともせずに過ごしているように思えた。なぜ建築を学ぶのか。私にとってこの実習は思い出としてではなく、自分に問いを投げかけるきっかけとして、貴重な経験として、胸に刻み込まれることとなった。



チャコールでのスケッチ

石膏模型は、はじめに型を作り、その型に石膏を流し入れて作る。そのため、建物自体でない部分すなわち空間を埋め、建物の部分は空白となるように考えて型を作ることになる。建物自体を形作る普段の模型製作よりも物体の凹凸をイメージする力が必要で、とてもやりがいがありおもしろかった。昼ごはんも後回しにするほど夢中になって制作に取り組み、完成した時には達成感と満足感と同時にこんなに集中できる力を持っていたのかと驚いた。

ロンドン自然史博物館のエントランスホールをモデルにスケッチと石膏模型の制作を行った。滞在中、様々な美術館や博物館に行ったが、このエントランスホールの天窓から入る光で照らされた大きなホールと、まるでホールを泳いでいるようなシロナガスクジラの骨格標本が一番印象に残ったからだ。ホールの脇には洞窟のような展示スペースがありホールの明るい雰囲気と対照的に薄暗くなっている。光に溢れたホールと落ち着いた展示スペースとの明暗やホールのアーチなど、特徴的な部分を思い出しながらなるべく写真を見ずに描いた。ホールのアーチを思わせるクジラのあばら骨が真ん中にあり、面白い構図となった。



古川先生から指導を受ける様子



完成した石膏模型





盛合一功 / 実習の感想：学外実習を通してとても多くのことを見て、聞いて、感じる事ができた。ロンドンの街はまさに「異世界」が広がっていて、深く息をのんだ事を鮮明に覚えている。建物や街並から伝わってくる文化や歴史にとっても感動した。地震の少ない国だからこそ可能な大胆なデザインや世界のトップがつくり描く建築にアートとしての魅力を感じた。自分の中でのデザイン制限の殻を砕くほどのインパクトを受け、いい刺激を受けることができた。



盛合一功 / 石膏模型について：私はロンドンで一番印象深く感動した London bridge をテーマに石膏模型の作成を行った。London bridge はロンドンを象徴する有名な橋の一つだ。私はこの橋を渡るまでは橋のシルエットや町との調和に魅力があるのだと思っていたのだが、本当に魅力的なのはその大胆なシルエットとは対照的な細かい装飾だった。遠くからでも綺麗だが近くで見るとさらに魅力が増していた。この繊細で美しい装飾を表現するために石膏模型で可能な範囲、橋の立面を表現した。

